



ひなどり

園だより 11月号
令和2年11月4日
新潟市立新津第三幼稚園

教育相談・子育て支援の視点から

園長 間嶋 哲

昨日は新津第三小学校の就学時健康診断があり、各園から121名の新一年生が集まりました。もちろん当園のあやめ組の子どもたち、そして保護者の皆さんにも会い、ご挨拶させていただきました。3年前の今頃、あやめ組の子どもたちが初めて登園し、遊戯室で激しく駆け回っていた頃を思い出し、今現在の成長ぶりと照らし合わせながら、感慨にふけていました。

「園長先生」と声をかけてくれる子どもがいる一方で、もうすでに「校長先生」と声をかけてくれる子どももいます。このこと自体が成長そのものです。毎年この時期になると、私自身が校長でもあるので、「子どもたちは混乱しないだろうか」という危惧を持つと同時に、三幼から入学してくる子どもたちに誇りを持つのです。

当園を修了した子どもたちが小学校に入った後の様子を見てみると、臍負（ひいき）目かもしれませんが、どの子どもも各クラスの中心的存在となっていることが多いように思えてなりません。また、幼稚園時代に行動面から心配なお子さんがいたとしても、小学校に入学した後、その心配さを引きずっているという話を全く聞かなくなるのです。この要因は、保護者の皆さんの子育てが順調であることに加え、当園の保育の質が高いことによるのではないかとこの自負もあります。

就学時健康診断の後、ある男の子と保護者が教育相談にお越しになりました。男の子にありがちな「落ち着きのなさ」についての相談です。部屋に入っただき、椅子にすわった直後、やはり男の子の姿勢が崩れるのです。そのとき、そのお母さんが「ちゃんとしなきゃ駄目でしょ」と、機嫌悪そうにおっしゃるのです。その場は、決して首都圏でよく見られる「お受験の場」ではありません。ありのままの子どもでよいのです。

結構強い口調で、子どもが怯えているように見えたので、つつい「お母さん、大丈夫ですよ。叱ることや押さえることで、たとえ一時的に良くなったとしても、長続きはしませんよ」と言っしまいました。子どもは、本来、落ち着きがないものなのです。落ち着きが極端になくなるのは、いろいろなことに興味津々であったり、心のどこかに不安があったりするからです。前者であれば、心配は全くありません。親のイライラが、そのまま子どもを不安にさせることもあります。落ち着きがなくなる原因を、深く考えてみるゆとりを持たないといけません。数分ほど話をした後、少し言い過ぎたかなと悔やみましたが、その後、不思議とそのお母さんは、ゆったりとした穏やかな顔に変わり、いろいろな事情を話してくださいました。

ところで幼稚園教育要領の中には、幼稚園の役割として「子育て支援」の項目もあり、子育て相談や子育て情報などが求められています。つまり、子育てについて相談していただくことも、幼稚園の大切な役目なのです。何か子育てのことで悩んでいることがあれば、当園の教職員、誰でも結構なので、どうぞ気軽にご相談ください。